

対人援助職者のソーシャルスキル尺度の
開発のための予備的研究
～対人援助職を目指す学生を対象として～

樋口倫子* 橋本佐由理*

Preliminary Study of the Social Skills Scale Development
for Helping Professions

Noriko Higuchi and Sayuri Hashimoto

Department of Human Care Science, Graduate School of
Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

The purpose of this preliminary study was to develop Social Skill Scale (SSS) for helping professions and investigate its reliability and validity. SSS was newly designed as a self-report measure of social competence based on theory of Health Counseling and that of essential needs of the soul (affection seeking demand, self-trust demand, need for affection).

First, to develop the SSS, we defined the concept of social skill based on theory of essential desires of the soul (self-trust competence, affection competence). Then, in this study, one hundred and fifty-one subjects completed 41-items SSS, KISS-18 and 7 psycho-social scales (SDS, STAI, Problem-solving, Self-repression, Alexithymia, Interpersonal Dependency, Self-dissociation).

Content validity was confirmed by specialist (health behavioral scientist). SSS was statistically evaluated of construct, criterion-related validity and consistency reliability. Construct validity was assessed by factor analysis, eleven factors were extracted. Criterion-related validity was assessed by comparing SSS with some psycho-social scales. Cronbach's alpha coefficient was 0.92.

Nineteen items were changed to adequate expression and 5-items were added, for inadequate correlating with some psycho-social scales or comments of specialist. Finally, SSS constructed 46-items.

キーワード

ソーシャルスキル尺度 Social Skill Scale

尺度開発 Inventory development

心の本質的欲求理論 Theory of essential needs of the soul

対人援助職 Helping professions

I. はじめに

カウンセリングにおける問題解決や自己成長支援では、問題解決の現実的対処のためにはソーシャルスキルガイダンスが重要であることが言われている（宗像，2000）。筆者らのカウンセリング実践においても、ソーシャルスキルの有無が、カウンセリング後の目標行動の実行度や成否を左右することがわかっている。

ヘルスカウンセリング学会主催のカウンセラー養成セミナーの参加者は、カウンセリング技術を自分のストレスマネジメント能力向上や自己成長などに役立てるためや、対人援助者として指導や相談にカウンセリング技術を取り入れること、被援助者の行動変容や問題解決などの支援に役立てることを目的に参加する者が多い。対人援助者は、自己カウンセリングスキルやカウンセリングスキル、リスニングスキルをはじめとするソーシャルスキルを援助技術として必要としているのである。前述のセミナー参加者の割合をみると、看護師32%、保健師14%、薬剤師9%、管理栄養士または栄養士8%、歯科医師2%、その他に医師や教員、心理相談員、企業の管理職などが主であった（橋本，2003）。

既存のソーシャルスキル尺度は多く存在するが、自己表現や自己主張ができるか否かの測定が中心となっている。和田（1991）は、ソーシャルスキルとしてはこれだけでは事が足りないと指摘しているが、我々も自己カウンセリングスキルやカウンセリングスキル、リスニングスキルなどのスキルの測定も可能である尺度が必要であると考えた。

そこで本研究では、以下に述べる新たなソーシャルスキルの概念のもとに、

対人援助者や対人援助職を目指す学生を対象に広く適用し得る、自己報告形式のソーシャルスキル尺度を作成するために、本稿では尺度開発に向けた予備的調査を実施し、その結果から尺度項目の検討をすることを目的とした。

II. 本研究でのソーシャルスキルの構成概念について

我々のカウンセリングによる対人援助経験からの知見に基づき、人が自分自身の悩みや気がかり、ストレスなどの解決のためや、気づきやセルフケア、自己成長のために必要と考えられるスキルをソーシャルスキルとして捉え、その構成概念を構築することとした。

ところで、人がストレスや悩みを抱えたり、自己成長を望む時というのは、心の本質的欲求の不充足があったり、充足を求めている時である。人間の欲求には一次的欲求（生理的欲求）と、二次的欲求（社会的欲求）がある。宗像（2001 a）の心の本質的欲求理論によれば、この二次的欲求は、「心の本質的欲求」と称され、①人から愛され、認められたいという他者に充足を求める欲求（慈愛願望欲求）、②他者の評価にかかわらず、自分を認め、信じ、成長させたいという自己を充足する欲求（自己信頼欲求）、③他者の評価にかかわらず、相手を愛し、認め、感謝したいという他者の欲求を充足する欲求（慈愛欲求）が、本能的に存在すると提唱されている。

そこで、本研究では、宗像の提唱したSATカウンセリング理論の中の「心の本質的欲求理論」に基づき、以下のようにソーシャルスキルを概念化した。それは、「社会において自分の心身の健康を保ちつつ、①自分の能力を最大限に発揮でき、②周りとの関係の中で、より自分の能力が活かされ、③自分の中に生じた成長心と防衛心との矛盾した感情が引き起こす悩み事や問題が解決できる能力、すなわち、自己信頼力（周りの評価に関係なく自分を認め、信じたい心に基づくエネルギー）を高めるスキルである。また、社会において周りの心身の健康を支えつつ、④他者の能力を最大限に引き出すことができ、⑤他者との関係の中でお互いに本当の感情や要求を伝え合い、⑥理解し共感し合える

能力、すなわち、慈愛力（素直に他者を信じ、認め、愛する心に基づくエネルギー）を発揮するためのスキルである。」という定義である。心の本質的欲求の充足が問題解決や自己成長には不可欠であるので、自己信頼力を高め、力強い慈愛力を発揮し、自他共に愛し認めることができることにより、他者からも愛し認められ、慈愛願望心の充足もなされていく。

人が各自の問題解決や自己成長のために必要なソーシャルスキルには、リスニング、アサーション、プレゼンテーション、ディベート、ストレスマネジメント、タイムマネジメント、問題解決、カウンセリング、自己カウンセリング、自己管理等の各種のスキルが挙げられる。これらのスキルの測定のために、我々の定義に基づき具体的に取り上げた測定し得る対処技能の内容は、次の通りである。まず、自己信頼欲求を効果的に充足するために必要な対処技能として測定するものは、①ストレスマネジメント力、②タイムマネジメント力、③目標設定力、④課題設定力、⑤問題対処力、⑥情報処理力、⑦即時行動力、⑧自己カウンセリング力、⑨自己受容力、⑩自己責任力、⑪自己判断力、⑫自己アピール力、⑬プレゼンテーション力、⑭自己開示力を取り上げた。また、慈愛欲求を効果的に充足するために必要な対処技能として測定するものは、①観察力、②傾聴力、③確認力、④共感力、⑤他者委任力、⑥他者受容力、⑦他者尊重力、⑧他者プラス評価力、⑨カウンセリング力、⑩アサーション力、⑪他者援助力を取り上げ、その他に⑫基本マナーを加えた。予備調査後に尺度に不足している対処能力として、素直さと粘り強さが考えられ、これらも加え、逆転項目とした。

Ⅲ. 「ソーシャルスキル」尺度の開発手順

1. アイテム・プールの作成

国内外で開発された尺度を文献により検討した上で、我々の独自の定義に基づき、自己信頼力および慈愛力を高める対処能力のカテゴリーをⅡに挙げたよ

対人援助職者のソーシャルスキル尺度の開発のための予備的研究に明らかにした後、それぞれのカテゴリーに1～3の質問項目を作成し、全体で41項目の質問項目の作成を行った。予備調査後に調査結果と、専門家（ここでは、ヘルスカウンセリング学分野や保健行動科学分野の専門家を指す。以下同様。）による意見を合わせて、項目の修正及び追加をし、46項目の質問項目の作成を行った。

2. 妥当性および信頼性の検討

予備調査において、専門家のチェックによる内容的妥当性、菊池（1988）が開発したソーシャルスキル尺度（KiSS-18）およびストレス行動特性との基準関連妥当性、内的一貫性による信頼性の検討をした。

IV. 研究方法

1. 調査対象

歯科医師や看護師を目指す4年制大学1年生120名、専門学校1年生67名とした。さらに、対人援助者としてコミュニケーション能力が必要とされる看護臨床指導者32名を、対照群とした。

2. 質問紙調査票の内容

① ソーシャルスキル尺度（41項目）

筆者らがIIに示したようなカテゴリーに基づいて、新たに作成した項目から成る。ソーシャルスキルの有無を測定するもので、得点が高いほどソーシャルスキルを有する。リッカート法による5段階の回答肢「いつもそうする」「たいていそうする」「したりしなかったり」「あまりしない」「絶対にしない」に対して、5～1点の得点を与え、その他に「わからない」の回答肢を設けた。[41項目、41～205点]

② 対人依存型行動特性尺度（ハッシュフェルド（1977）による開発、P. マ

クドナルド・スコット編訳，日本人における得点基準は宗像による) [18項目，0～18点]

- ③ 自己抑制型行動特性尺度 (宗像，1996) [10項目，0～20点]
- ④ 抑うつ尺度SDS (Zung，1960) [20項目，20～80点]
- ⑤ 特性不安尺度STAI (Spielberger，1970) [20項目，20～80点]
- ⑥ 問題解決型行動特性尺度 (宗像，2001b) [10項目，0～20点]
- ⑦ 感情認知困難度尺度 (宗像，2001b) [10項目，0～20点]
- ⑧ 自己憐憫症尺度 (宗像，2001b) [10項目，0～20点]
- ⑨ 自己解離性尺度 (宗像，2001b) [10項目，0～20点]
- ⑩ KiSS-18 (菊地，1988) [18項目，18～90点]

3. 調査方法

2002年5～7月に，自記式質問紙調査票により，それぞれの対象群および対照群に集団一斉方式で実施した。

4. 分析方法

ソーシャルスキル尺度 (41項目) について，内容的妥当性の検討を行い，基準関連妥当性分析，内的一貫性による信頼性分析を施行した。さらに，社会経験の有無による差を検討するために，対象より対人援助の社会経験のある学生と臨床指導者を合わせて社会経験有り群とし，それ以外を社会経験無し群とし，2群にわけT検定を施行した。これらの結果を検討した上で，項目の修正および専門家のアドバイスにより項目の追加を行った。分析には，SPSS ver.11を用いた。

V. 結果

調査票の回収数（率）は、213（97.3%）であった。ソーシャルスキル尺度の分析や他との関連の分析には、ソーシャルスキル41項目尺度に「わからない」と答えた項目および未記入が1項目でもある者を除いた151名（68.9%）を用いた。

全対象者の平均年齢は、 23.01 ± 5.51 歳（17～47歳）、性別では男性87名、女性123名、無回答3名で、きょうだいの人数による内訳は、0人が17名、1人が83名、2人が67名、3人以上は30名、無回答は16名であった。

社会経験の有無で分けた社会経験有り群（70名）は、経験平均年数は、 8.29 ± 5.4 歳（1～23年）、平均年齢 30.2 ± 6.4 歳（21～47歳）、女性59名、男性11名であった。一方、社会経験無し群は、平均年齢 19.2 ± 1.7 歳（19～26歳）、女性64名、男性76名（無回答3名）であった。

ソーシャルスキル尺度の各項目の平均得点と標準偏差、各項目と他の尺度との相関は、表1に示した。ソーシャルスキル尺度の合計得点は、平均は 148.34 ± 18.13 点（100～201点）であった。「わからない」と答えた者が多い項目は、最大8名と極めて多い項目はなかった。内的一貫性を示す信頼性係数クロンバッハ α 係数は0.92であり、何れの項目を削除した場合にも、 α 係数に大きな変化は認められなかった。

基準関連妥当性の検討のため表2に示した他の尺度との相関をみると、抑うつ尺度と問題解決型行動特性尺度、KiSS-18との間に有意な相関がみられた。

社会経験有り群（61名）と、社会経験無し群（89名）とのソーシャルスキル尺度の平均得点は、前者が 149.9 ± 17.7 点、後者は 147.4 ± 18.5 点と、有意な差は認められなかった（ $t = 0.851$, n.s.）。

表1 ソーシャルスキル尺度(41項目)における
各項目の平均得点と標準偏差および他の尺度との相関分析, 信頼性分析の結果

<p>各項目と他の尺度との相関は、我々のソーシャルスキルの定義に鑑み、理論的に関連がある7つの尺度と相関が有意傾向あるいは有意でないものを採用するために検討した（これらの尺度に対して、正の相関があることは理論的に望ましくない）。 有意水準は、† p < .10 * p < .05 ** p < .01で表し、表1には正の有意あるいは有意傾向のものを記している。</p>	
<p>ソーシャルスキル尺度(41項目) n=151</p>	
<ol style="list-style-type: none"> 1 できる見通しのない仕事は、やたらに引き受けない 2 物事の優先順位を考えて行動する 3 新しいことをする時は、積極的に見通しを得るように手をうつ 4 相手から非難された時に、逃げずに対処する 5 多くの情報の中から、自分に必要な情報を取捨選択する 6 自分の気持ちに素直に行動する 7 疑問を感じたり、わからないことは、その場ですぐに確かめる 8 疲れていても、必要な時は行動する 9 悩みを抱えた時に、そのままにせず自分で解決する 10 自分の気持ちの癖に気づき、それに対処する 11 不快感が生じた時に、それをセルフコントロールする 12 自分の能力の限界を踏まえて行動する 13 自分の身に起こったマイナスの出来事でも受け入れる 14 自分に非がある時は、それを素直に認め自分から謝る 15 自分が始めたことは、最後まで自分がやり遂げる 16 周りの意見に感わされることなく、自己決定する 17 自分の気持ちや意見が、相手に伝わるように話す 18 自分の感情や気持ちを素直に表現する 19 相手に応じ、適確な表現で物事を伝える 20 必要に応じて、自己開示をする 21 相手の話の背後にある感情をとらえながら聴く 22 相手が真剣に話をしている時は、途中で口を挟まない 23 相手が真剣に話をしている時は、別のことを考えない 24 相手の顔色や表情の変化をとらえながら、会話をする 25 思い込みや勘違いを防ぐために、相手の言動に対して確認を取る 26 相手の言動の背後にある気持ちや感情を理解しようとする 27 相手を理解するためには、相手の世界で考えようとする 28 相手が自分でチャレンジし、やり遂げることを信じ見守る 29 たとえ時間がかかっても、必要以上に手伝わず相手に任せる 30 自分とは異なる価値観を持つ人でも、受け入れる 31 疲れていても、相手を無視しない 32 相手に感謝の気持ちを率直に表現する 33 相手のよいところや優れたところを見つけて伝える 34 相手の悩んでいる時に、本人が自分で解決できるように支援する 35 相手が怒っている時でも、寄り添う 36 人と意見が違う時、相手も尊重しながら率直に話し合う 37 言い出しにくいことでも、相手に必要なことは必ず言う 38 相手が困っている時に、相手が満足するように助ける 39 顔見知りの人には、自分から笑顔で挨拶する 40 相手が真剣に話をしている時は、別のことをしない 41 周りの状況に応じた態度をとる 	

平均得点 (5点満点)	標準偏差	対人依存型行動 特性	自己抑制型行動 特性	抑うつ (SDS)	特性不安 (STAI)	感情認知困難度	自己憐憫度	自己解離度	項目を削除した ときの α 係数
3.26	0.96								0.924
3.85	0.97								0.921
3.42	0.94								0.920
3.35	0.89								0.921
3.85	0.85								0.922
3.50	0.89								0.922
3.21	0.84								0.921
3.79	0.96								0.921
3.57	0.82							**	0.920
3.26	0.92							**	0.920
3.58	0.83							**	0.921
3.30	1.08								0.924
3.60	0.96						†	*	0.920
3.90	0.87								0.921
3.78	0.86					*			0.920
3.38	0.93								0.919
3.68	0.86								0.920
3.62	1.01								0.921
3.68	0.85								0.920
3.44	1.00								0.920
3.85	0.92	†	*		†				0.920
3.95	0.84								0.920
3.78	0.92					*			0.920
4.08	0.87		**						0.919
3.41	0.87		**						0.920
3.97	0.84		**	*	*	†			0.919
3.33	1.00		*			†			0.920
3.62	0.82					†			0.921
3.25	0.86								0.921
3.62	0.91						†		0.920
3.70	0.88								0.921
4.15	0.79						*	†	0.920
3.69	0.94								0.920
3.56	0.82								0.919
3.03	0.95			†					0.921
3.52	0.86								0.919
3.28	0.98								0.920
3.50	0.77	*			†				0.921
4.02	0.90								0.921
3.99	0.81								0.920
4.05	0.81	*			*				0.920

ソーシャルスキル尺度の内的一貫性：クロンバッハ α 係数 = .9223

表3 ソーシャルスキル尺度(41項目)の因子分析の結果

項目 ナンバー	第1因子 負荷量	第2因子 負荷量	第3因子 負荷量	第4因子 負荷量	第5因子 負荷量	第6因子 負荷量
27	0.666					
26	0.652					
21	0.594					
25	0.441					
35	0.406					
34	0.379					0.294
33	0.293					
6		0.759				
18		0.578				
7		0.434				
20		0.412				
14			0.806			
11			0.460			
32			0.357			
4			0.301			
23				-0.696		
22				-0.534		
40				-0.515		
36				-0.409		
30				-0.408		
24				-0.299	0.290	
5					0.414	
31					-0.346	
29						0.709
28						0.561
15						0.402
12						
10						
8			0.367			
1						
2						
3						
13				-0.360		
16						
9						
19						
17						
37		0.319				
39						
41						
38	0.335					
回転後の 固有値	10.084	1.994	1.681	1.608	1.090	0.995
累積 寄与率(%)	24.594	29.458	33.557	37.479	40.139	42.566

第7因子 負荷量	第8因子 負荷量	第9因子 負荷量	第10因子 負荷量	第11因子 負荷量	初期 共通性	因子抽出後 共通性
					0.598	0.601
					0.674	0.666
					0.680	0.657
					0.475	0.363
					0.441	0.478
				0.332	0.608	0.561
					0.574	0.449
			-0.323		0.530	0.577
					0.589	0.579
					0.483	0.400
					0.495	0.502
					0.548	0.641
					0.465	0.513
					0.468	0.393
					0.539	0.452
					0.612	0.625
					0.555	0.551
					0.588	0.506
					0.535	0.480
					0.488	0.458
					0.607	0.630
					0.382	0.364
	0.294				0.463	0.472
					0.460	0.573
					0.492	0.549
		0.351			0.595	0.605
0.494					0.396	0.326
0.447					0.510	0.568
-0.372					0.490	0.550
	0.419				0.227	0.186
		0.581			0.490	0.455
		0.502			0.525	0.482
		0.439			0.583	0.661
		0.422			0.610	0.553
		0.297			0.464	0.411
					0.648	0.731
				-0.743	0.608	0.589
				-0.640	0.565	0.520
				-0.326	0.514	0.492
					0.641	0.492
					0.496	0.504
					0.342	0.370
0.863	0.760	0.736	0.630	0.599		
44.670	46.525	48.319	49.855	51.316		

因子抽出法：主因子法・回転法：Kaiserの正規化を伴うオプティミム法

表2 ソーシャルスキル尺度 (41項目) と他の要因や尺度との相関

要因や尺度	相関係数 r	有意水準
性別 (男1女2)	-0.047	n. s.
年齢	0.112	n. s.
きょうだいの人数	0.086	n. s.
抑うつ尺度 (SDS)	-0.174	$p < .05$
特性不安尺度 (STAI)	-0.107	n. s.
問題解決型行動特性尺度	0.434	$p < .001$
対人依存型行動特性尺度	-0.023	n. s.
自己抑制型行動特性尺度	-0.082	n. s.
KiSS-18	0.639	$p < .001$

主因子法、直接オブリミン法による因子分析の結果、固有値1以上に設定したところ、11因子が抽出され、累積寄与率は51.32%であり、表3に示したように命名できた。

ストレス行動特性の各尺度値との相関係数が有意および有意傾向をもつ項目と専門家からのアドバイスを得た項目、合計19項目 (表1の項目番号: 9, 10, 11, 13, 14, 15, 20, 23, 24, 26, 27, 28, 30, 32, 35, 36, 38, 39, 41) について文章表現の修正を行い、新たに素直さや粘り強さを問う項目を5項目 (表4の項目番号: 42~46) 加え、逆転項目 (表4の項目番号: 9, 13, 23, 38, 46) も設けた。

表4 項目追加修正後のソーシャルスキル尺度(46項目)

質問文：下の項目について、ふだんのあなたはどのようにしていますか。
自分の普段の行動を思い出して1～5の中でもっともあなたにあてはまるものに○をつけて下さい。

選択肢：1「いつもそうする」 2「たいていそうする」
3「したりしなかったり」 4「あまりそうしない」
5「絶対にそうしない」

- 1 できる見通しのない仕事は、やたらに引き受けない
- 2 物事の優先順位を考えて行動する
- 3 新しいことをする時は、積極的に見通しを得るように手をうつ
- 4 相手から非難された時に、逃げずに対処する
- 5 多くの情報の中から、自分に必要な情報を取捨選択する
- 6 自分の気持ちに素直に行動する
- 7 疑問を感じたり、わからないことは、その場ですぐに確かめる
- 8 疲れていても、必要な時は行動する
- 9 悩みを抱えた時に、周りが助けてくれるのを待つ R
- 10 自分の生きがいや目標をいつももっている
- 11 不快感が生じた時に気持ちをコントロールできる
- 12 自分の能力の限界を踏まえて行動する
- 13 自分の身に起こったマイナスの出来事はなるべく思い出さない R
- 14 自分に非がある時は、それを認め素直に謝る
- 15 自分で始めたことは、最後まで無理せず自分でやり遂げる
- 16 周りの意見に感わされることなく、自己決定する
- 17 自分の気持ちや意見が、相手に伝わるように話す
- 18 自分の感情や気持ちを素直に表現する
- 19 相手に応じ、適確な表現で物事を伝える
- 20 ありのままの自分を自己開示できる

表4の続き

- 21 相手の話の背後にある感情をとらえながら聴く
- 22 相手が真剣に話をしている時は、途中で口を挟まない
- 23 相手が困っていたら、同情する R
- 24 会話の時には、言葉以外の情報も収集する
- 25 思い込みや勘違いを防ぐために、相手の言動に対して確認を取る
- 26 話している相手の言動の背後にある気持ちや感情を捉える
- 27 相手と分かり合うために、お互いの思いを受け止め合う
- 28 相手が自分でチャレンジし、やり遂げることをあきらめずに見守る
- 29 たとえ時間がかかっても、必要以上に手伝わず相手に任せる
- 30 自分とは、異なる価値観でも受け入れる
- 31 疲れていても、相手を無視しない
- 32 感謝の気持ちは、素直に表現する
- 33 相手のよいところや優れたところを見つけて伝える
- 34 相手の悩んでいる時に、本人が自分で解決できるように支援する
- 35 怒っている人の話も真剣に受け止められる
- 36 人と意見が違う時、相手も尊重しながら率直に話し合う
- 37 言い出しにくいことでも、相手に必要なことは必ず言う
- 38 相手が困っている時には精一杯励ます R
- 39 初対面の人に自分から笑顔であいさつする
- 40 相手が真剣に話をしている時は、別のことをしない
- 41 周りの状況に応じて、必要な行動をとる
- 42 素直な気持ちで、人と接する
- 43 相手に（周りに）自分の気持や考えを、素直に伝える
- 44 物事を決める時には、あきらめることなく話し合う
- 45 相手と意見がぶつかっても、あきらめずに伝える
- 46 相手から感謝されるように行動する R

* Rは逆転項目

VI. 考察

本尺度は、専門家らを含めた協議により測定内容が吟味され、内容的妥当性を有する尺度項目であると考えられ、クロンバッハ α 係数も0.9以上と内的一貫性も確認された。

次に、項目選定のために行った因子分析では、回転後の因子パターンは、それぞれ予め筆者らが心の本質的欲求理論によって分割したカテゴリー、すなわち7つの「自己信頼力を高めるスキル」と、4つの「慈愛力を発揮するスキル」に基づく因子と解釈され、いずれの項目も必要な項目と判断した。

我々が基準関連妥当性を検討するために用いたKiSSは、Y-G性格検査の抑うつ傾向や神経質傾向および劣等感と負の相関がみられている。また、Segrin (1994) は、長期にわたるソーシャルスキルの不足は、特に気分の変調などのうつ慢性的な症状と関連していると述べている。本ソーシャルスキル尺度は、KiSSという他のソーシャルスキル尺度や精神健康度を示す抑うつ尺度、ストレス行動特性の一つである問題解決型行動特性と有意な妥当性係数が得られたことで、基準関連妥当性は確認された。

今回の調査では、学生と臨床指導者の本ソーシャルスキル尺度の得点には差が見られなかった。これは、和田 (1991) が、きょうだいや友人が多いことや恋人がいることなどがソーシャルスキルの獲得と関連があると述べているように、大切な人との関係開始や維持の中で訓練を積むことや、重要他者や周りのよいモデルによるモデリングがなされることが、スキルの向上には必要であると思われる。従って、単に社会経験を積んでいるかどうかだけではスキルの獲得には繋がりにくいと推察され、差が認められなかったものと考えられた。

本尺度がより自己信頼力や慈愛力を高めるためのスキルを測定する尺度となるためには、慈愛願望欲求に基づいたスキルを排除することが必要である。そこで、各項目とストレス行動特性との関連を検討し、相手に嫌われないように自分の気持ちを抑えながら行動したり、感情を認知しないようにして対処して

いるなどと思われる項目には修正を加え、専門家のアドバイスにより、逆転項目も設けて46項目を選定した。

ヘルスカウンセリング理論を基盤とした新たなソーシャルスキル尺度の開発を試み、46項目が決定された。改定された尺度により、今後、因子的妥当性、検査—再検査信頼性、内的整合性、構成概念妥当性の検証を進める予定である。

引用文献

- 1) Hirschfeld RMA (1977) : A measure of interpersonal dependency, J of Personality Assessment, 41.
- 2) Segrin C, Abramson LY (1994) : Negative reactions to depressive behaviors : A communication theories analysis, J of Abnormal Psychology, 103 (4), 655—668.
- 3) Spielberger CD, et al (1970) : STAI manual, Palo Alto, Calif, Consulting Psychologist Press (水口公信ら訳, 日本語版STAI使用手引き, 三京房).
- 4) Zung WWK (1960) : A self-rating depression scale, Arch of General Psychiatry, 12, p.63 (福田一彦ら訳, 日本語版SDS使用手引き, 三京房).
- 5) 菊池章夫 (1988) : 思いやりを科学する, 川島書店.
- 6) 今野裕之 (2001) : KiSS-18, 心理測定尺度集II, 堀洋道 (監修), サイエンス社 初版, pp.170—174.
- 7) 橋本佐由理 (2002) : 人間関係調節の達人 第1回 目指せ聞き上手, ナースデータ, 24 (1), 30—36.
- 8) 橋本佐由理, 宗像恒次 (2003) : SATカウンセリングプログラムのストレスマネジメント効果に関する研究, 日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科 第9号 (印刷中).
- 9) 宗像恒次 (1996) : 行動科学からみた健康と病気, メヂカルフレンド社, 東京, pp.25—29, pp.128—129.

- 10) 宗像恒次, 小森まり子, 橋本佐由理 (2000): ヘルスカウンセリングテキスト2, p.106.
- 11) 宗像恒次 (2001 a): 現代カウンセリング事典 國分康孝 (監修), 金子書房, p.49.
- 12) 宗像恒次 (2001 b): 心の想起・伝達・変換の科学 (6) 潜在化した未解決な感情を測定する, ヘルスカウンセリング, 3 (6), 94-102.
- 13) 和田実 (1991): 対人的有能性に関する研究 ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成, 実験社会心理学研究 31 (1), 49-59.